

G. 心臓・血管

123 呼吸器疾患における右室負荷診断法としての $Tl-201$ 心筋シンチの臨床的検討
 平山二郎、金井久容、藤井忠重、草間昌三（信大一内）、矢野今朝人（信大 中放）

$Tl-201$ 心筋シンチによる右室壁の描画を試み、その集積度と臨床所見（右室負荷徵候）とを対比した。シンチカメラミニコンピュータシステムを用い、LAO 30°にて $Tl-201$ の動画像および 4 方向の画像を収録し、右室摂取率を算出し、これを参考にして右室集積度を 0～3+の 4 段階に区分し、2+以上を陽性とした。

呼吸器疾患 343 例中 111 例で右室描画陽性であり、右室集積度 2+は 101 例、3+は 10 例であった。右室負荷徵候は 3+の例には高率にみられたが、2+の例では低率であった。心電図の右室肥大基準（Milnor, Roman, WHO, 筑本ら）を満足した例は、3+例ではそれぞれ、8/10, 7/10, 5/10, 8/10, 2+例では 5/101, 17/101, 2/101, 12/101 と低率であり、また、胸部 X 線写真上での右下行肺動脈の拡張及び側面像での右室拡大所見の出現頻度も低率であった。血液ガス所見との対比では、集積度が増加するにつれて、 P_{aO_2} は減少する傾向がみられたが、 P_{aCO_2} には一定の傾向はなかった。

$Tl-201$ 心筋シンチグラフィーにより、各種臨床所見と必ずしも対応しない種々の程度の右室壁描画が示され、右室摂取率の算出と意味づけは重要と考えられる。

125 虚血性心疾患（IHD）における肺野 ^{201}Tl 活性の臨床的意義－特に早期 wash out 関する検討
 桝谷定志、大森好晃、南地克美、藤谷和大、前田和美、福崎恒（神大、一内）、長浜四郎（小原病院）

運動負荷 ^{201}Tl 心筋シンチにおいて、肺野 ^{201}Tl 活性の増加が、IHD の重症度の示標であることを報告してきたが、今回は、 ^{201}Tl 投与後早期の肺 ^{201}Tl 活性の動態を観察し、その臨床的意義について検討した。対象は冠動脈写で確診した正常及び IHD 患者で、一部の症例では運動時血行動態の測定を行なった。肺 ^{201}Tl 活性の評価は、運動中止直前に ^{201}Tl を投与し、1 分後より 15 分間 LAO -45° で連続的にデーターを収集し、肺 ^{201}Tl 早期 wash out index (WI) を算出した。正常例では WI は高値をとり早期肺 ^{201}Tl の変化は少ない傾向にあったが、IHD 特に負荷時心電図変化、狭心痛を呈した例では WI は正常に比し低値をとり、早期肺 ^{201}Tl 活性の clearance が早いことが観察された。以上より、IHD の重症度判定の示標として肺 ^{201}Tl 活性を用いる時、imaging の時期が遅れることは sensitivity が低可する可能性があり、又早期肺 ^{201}Tl 活性の clearance そのものが、ある程度 IHD の重症度の示標となることが示唆された。

124 負荷 ^{201}Tl 心筋シンチグラフィーによる右室虚血性病変の評価
 片岡一、高岡茂、大窪利隆、黒岩宣親、大重太真男、中村一彦、橋本修治（鹿児島大学医学部第 2 内科）

負荷 $Tl-201$ 心筋シンチ像と冠動脈造影所見との対比を行ない、右室の虚血性心病変評価における $Tl-201$ 心筋シンチグラフィーの有用性について検討した。対象は冠動脈病変 ($\geq 75\%$ 狹窄) を有する群（RCA群）15 例と、有さない群（non-RCA 群）20 例である。最大負荷心筋シンチ像の 30 度、60 度左前斜位 2 方向像における右室自由壁の描出度、ならびに形態的特徴を我々の評価法により段階区分し、以下の結論をえた。

(1) RCA 群では少くとも 1 方向像において右室自由壁の $1/2$ 以上の描出不良 (abnormal $Tl-RV$) を認めた症例が 15 例中 9 例であった。これに対し、non-RCA 群では 20 例中 17 例で両方向像とともに右室自由壁の $1/2$ 以上の描出が (normal $Tl-RV$) 認められた。(2) Normal より abnormal $Tl-RV$ の criteria に従うと、右冠動脈病変の検出率は sensitivity 60%、specificity 85% となる。(3) 右室自由壁描出は、冠動脈病変部位、下壁硬塞合併の有無、副側血行路の有無と関連した。

126 運動負荷 ^{201}Tl 心筋血流シンチグラム肺活性の臨床的有用性
 益海信一朗、戸早雅弘、春見建一（昭大藤が丘、内）、古賀靖、篠原広行、片山通夫（同、放）

現在、運動負荷 ^{201}Tl 心筋血流シンチグラフィーは、冠動脈疾患の診断や重症度を推定する非観血的手法として広く使用されてきている。また、最近では冠動脈疾患において運動負荷 ^{201}Tl 肺活性の増加が運動負荷による左室機能障害をよく反映し、肺活性の増加する例では、安静時の左室機能障害や、合併症を認める例が多く、より重症の冠動脈疾患といわれ、負荷時の肺 ^{201}Tl 活性の増加は、冠動脈疾患の重症度や予後判定の手段として有用と考えられている。今回、虚血性心疾患例に、臥位エルゴメータ運動負荷試験による ^{201}Tl 心筋血流シンチグラフィーを施行し、安静時に $Tc-RBC$ blood pool 法による駆出分画、E. F. image、壁運動および心電図、冠動脈造影を行ない運動負荷 ^{201}Tl 肺活性の虚血性心疾患における臨床的有用性について検討した。